時評

地元の歌人たち

屋良健一郎

「短歌研究」四月号は「不思議な歌の国・名古屋」という特集を組んでいる。十五首の競詠に並ぶ名前を見るだけでも名古屋が優れた歌人を多く輩出してきたことが分かるが、加えて「名古屋はいかにして歌の国になったのか。」をテーマとする小塩卓哉の論考が当該地の短歌史を解説していて興味深い。大正期と戦後に名古屋で発行された短歌総合誌の存在や、短歌会館に関するエピソードなど、私には初めて知ることばかりで、名古屋の歴史・文化の豊かさの一端に触れた気がした。他にも、歌人たちが集まるという名古屋駅近くの中華料理店「平和園」を紹介する土井ラブ平の漫画もユニークだ。特集を読みながら、ある土地にこだわることで見えてくるその地ならではの短歌史や、「中央」とはまた異なる場の力のようなものの魅力を感じた。

同様に、三月に出版された『九州の歌人たち』（現代短歌社）も地方が生んだ歌人と作品の豊かさを私たちに教えてくれる。「現代短歌」二〇一三年九月号から二〇一五年十二月号までの連載を一冊にまとめたもので、阿木津英・黒瀬珂瀾・五所美子・恒成美代子・馬場昭徳の企画編集による。浜田到のような有名歌人も含まれているが、本書収録歌人の多くは現在普及している近現代のアンソロジーではあまり見かけることのない人たちだ。

・街道に撒かれし水のかわく間（ま）をしばし宿れる夕映（ゆうばえ）の色
　徳田白楊（一九一一年～一九三三年）

・編集室夕陽さしつつ地球儀の伸びたる影が机上より落つ
　持田勝穂（一九〇五年～一九九五年）

・冬の月まともに浴みてわれの身はひとしきり血を喀きし安けさ
　金石淳彦（一九一一年～一九五九年）

一首目・二首目ともに丁寧な観察眼と美的な感覚を持つ。三首目の作者は長い療養生活を送った。喀血を清々しく表現したこの歌は不思議な美しさを漂わせており、直立する命が心に残る。

・安否より出炭量を先に訊く受話器の奥の冷たき言葉
　工藤奈良生（一九二七年～一九九二年）

・夫たちの死をきはめんと坑深くくだる主婦らのかざす炎（ひ）の旗
　長山不美男（一九一三年～二〇〇二年）

特に印象的だったのが、炭坑に働く人や炭坑の街に暮らす人が詠んだ歌である。炭坑での労働の厳しさや危なさを伝える歌は、近現代の日本の成長を支えた人達の存在を読者に語り、命の大切さを改めて感じさせる。大規模な炭坑を有した（そして事故も多かった）九州という場ゆえの短歌だろう。『九州の歌人たち』は、地元では知られながらも中央ではあまり話題に上ることのない歌人に改めてスポットをあてた良書だ。「あとがき」からは、地方にあって良い作品を残した歌人を風化させずに後世に、そして地元だけではなく多くの人に伝えたいという願いが感じられる。

「毎日新聞」三月二十六日の短歌月評で松村正直は、高齢化などで各地の結社誌が終刊することで作品の豊かさが失われるのではないかと危惧を述べる。各地の歌人が自らの立っている地を、地元の歌人や短歌活動を振り返ることがいま必要かもしれない。